

彼は大切なものを人に与え、

困難なことを行い、

苦痛に耐え、

自分の秘密は告白し、

人の秘密は守り、

困窮している者を助け、

墮落した者を拒まない。

ブツダ：釈尊

「アングッタラ・ニカーヤ」 7.35

彼は大切なものを人に与え、困難なことを行い、苦痛に耐え、自分の秘密は告白し、人の秘密は守り、困窮している者を助け、墮落した者を拒まない。

ゴータマ・シッダッタ（釈尊） / 「アングッタラ・ニカーヤ」 7.35

出典：『ブッダが職場の上司だったら』 Dr. フランツ・メトカルフ & BJ ギャラガー著

灌仏会（かんぶつえ）

お釈迦さまは今から約 2500 年前の 4 月 8 日に北インド・ルンビニーの花園で生まれました。誕生の際に、様々な珍しいことが起こったそうです。

生母・摩耶夫人の右脇から生まれ、すぐに東西南北に 7 歩歩んで、天と地を指差し、「天上天下唯我独尊」（てんじょうてんげ ゆいがどくそん）と言われました。花園の花は、かぐわしい香りを放ち、甘く心地よい雨が降り注いだそうです。

このお話を元にして、毎年 4 月には、お釈迦さまのお誕生仏に甘茶をかけたり、白い像に花御堂をつけて町の中を行進したり、各地で花まつりの行事（灌仏会）が行われます。



ちびっ子フェスタ '16（越前市）

一方、行事をしても浄土真宗のお寺の本堂には（一般の仏壇にも）お釈迦さまのお姿が見当たりません。浄土真宗ではお釈迦さまをないがしろにしているのか？という違いがあります。お正信偈には、「如来世に興出したまう所以は、ただ弥陀の本願海を説かんとり」とうたわれております。

この如来というのは、お釈迦さまのことです。お釈迦さまがこの世にお出まし下さったのは、阿弥陀如来さまの御本願を私に知らせようとして下さったからだと言うのです。

なんとしてでもあなたを救いたいという阿弥陀如来さまが、そのことを私に知らさんがために、お釈迦さまという姿を表して、御本願を説いて下さったということなのです。

ですから、阿弥陀如来さまと別にお釈迦さまを拝むことはしないのです。しかし、お釈迦さまがこの世にお出まし下さったから、今私は、お念仏に出遇うことが出来ました。お誕生ありがとうございますとお勤めするのが灌仏会です。

引用：北御堂（浄土真宗本願寺派 津村別院）HP 『聞法 1991 年 7 月号』（著者：義本弘導）より

◆しばしば、お釈迦さんと阿弥陀さんはどう違うの？と聞かれるが、前者は実在した歴史上の人物であり、後者はその後に経典として語り継がれた仏様である。

釈迦族という小さな部族の王子として生まれたゴータマ・シッダッタは、人間世界における苦のありようを深く洞察し、縁起の道理を明らかにした。その偉業から釈迦族の尊い人とされた釈尊は、のちに（釈迦牟尼）仏として崇められようになり、伝説的なエピソードや前世の物語が生まれた。

7 歩歩いたというのも、迷いや苦しみの境界を経巡る六道（天、人、修羅、餓鬼、畜生、地獄）輪廻を越え、解脱する一歩、つまり仏法の目的とも解釈されている。

勿論、この「唯我独尊」を、この世で自分ほど偉いものはいないとうぬぼれることと誤用するのは論外だ。仏典の一つ『修行本起経』には、天上天下唯我独尊に続けて「三界皆苦 吾当安之」（さんがいかいくがとうあんし）と記されている。

三界とは、欲界（本能的欲望が強力で六道から六欲天までの領域。地下と地表、天界の最下層）、色界（淫欲と食欲を離れるが、物質的条件＝色にとらわれる境界。清らかで純粋物質のみ）、無色界（欲望も物質的条件も超越し、精神的条件のみを有する天界の境界）で、私はこれらの衆生全てを安んずるために誕生したのだから、尊いのであると言う。

一方、他のパーリ仏典や『大唐西域記』は、釈尊がこの世で解脱するからという点で尊いとしている。この、慈悲の面で尊いとするのか、解脱という面で尊いとするのかは、時代による釈迦観の違いとされる。

さて、表題の句で「彼」とは修行者、悟った者をいう。私たちも時々、人に奉仕し苦勞を引き受け、自らの過ちを認めるものの、こと他人に対しては不寛容であることが多いのではないか。怠惰で投げやりな人を受け入れるのは最も困難だ。自分を正当化し、安易な手段や快適な境遇にしがみつき、人を差別し自分の立場を守ろうとして、不和を起こしてしまう。

その本能的な欲求を制御し、他者も同じ原理で動くのだと認めていく対応が、円滑で誠実な人間関係を作る上で大切だと思い至る。ただし、その気づきもその場限りなのが情けない。（文責：報恩寺 林 暁）